

「気づき」のまちづくり ～「ひむか神話街道」における考察～

「神話と伝説のふるさと」といわれる宮崎県は、古事記や日本書紀に記されている日向神話をはじめ、歴史ロマンを彷彿させる数多くの伝説や史跡にあふれ、歴史資源の宝庫である。

宮崎県では、それら地域の宝を生かすため「ひむか歴史ロマン街道形成構想」を平成12年度に策定し、その構想を推進するためのモデルルートとして、天孫降臨、海幸彦・山幸彦などの神話や、平家落人、百済王などの伝説が残る地域をつないだ「ひむか神話街道」を平成15年6月に開通させ、地域づくりに取り組んでいるところである。

今回は、この「ひむか神話街道」を題材にして、まちづくりについての考察を行ってみたいと思う。

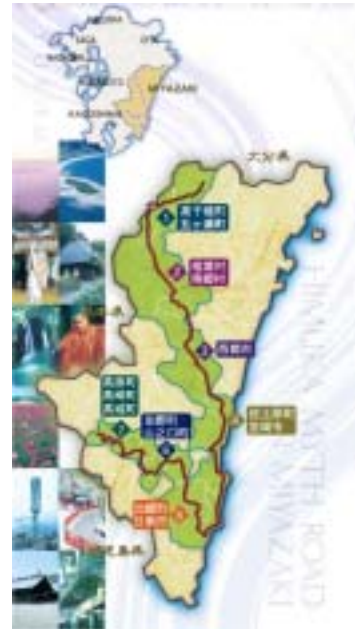
1 「ひむか神話街道」の現状

「ひむか神話街道」は、県北の高千穂町から県央、県南、そして県西の高千穂峰の麓の高原町を結び、基本的にはそれまであった国道、県道、市町村道などを組み合わせたルートで設定してある。

「ひむか神話街道」に対してよく言われる問題として、椎葉村から西都市までは山間部を通過するため、カーブが多い上に道幅が狭いところがあり、「道が悪い」という事がよく挙げられる。

また、そもそも道路が観光ルートとして作られたものではないので、通行していても「ひむか神話街道」らしい景観の場所ばかりではない点や、標識等が少ないため、道が分からない等についても挙げられる。

もう一つ、大きな問題点として私が考えているのが、県民に十分に浸透しているとは言えないのではないかとこの点である。県民のほとんどがなんとなく聞いたことはあるが、それについて県外からの観光客に道を尋ねられたときに答えられる県民は少ないのではないかと。



2 整備促進について

「ひむか神話街道」に一番多く言われる欠点は、『道が悪い』ということ。しかし、私は、全路線を整備し、大型バス等も含め通行できるようにするのは、費用対効果から考えて、やるべきではないことだと思う（現実にも、財政状況から考えて不可能だと思う。）し、このようなまちづくりについて全般にも言えることだと思うが、ただ金をかけて整備をすれば良いというものではないと考える。

現実には、どの自治体も財政危機の状況にあり、予算の伴う新たなまちづくり整備を行うには厳しい今の時代は、住民一人一人の力がこれまで以上に重要になってきていると考えられる。

3 景観について

私は、「ひむか神話街道」は、特に西都以北の天孫降臨神話の高千穂町、浄専寺しだれ桜の五ヶ瀬町、平家落人伝説の椎葉村、百済王伝説の美郷町、西都原古墳群の西都市までが一番いわゆる神話街道らしい道だと感じている。

ここは、山道でカーブも多く、道幅も狭い所もあるが、山の稜線や山里の集落の風景が美しく、私個人は大変好きな区間である。奥深い山を通行するたびに、ここが神々の住む山かと私に思わせてくれる。

しかし、区間が非常に長いからかもしれないが、風景が単調であったり、生活道路でもあるため、観光ルートと呼ぶにはその雰囲気欠ける区間も少なくない。

4 外からの視点

現在(H18.10.1～)宮崎市青島において「アート in 青島」という取り組みが行われている。これは宮崎にゆかりのあるアーティストたちが、観光地青島の各所に作品を展示し、青島の観光、地域振興に寄与しようという取組である。その地区で生まれ育ったわけではない若者が中心となって、青島観光の再生のため立ち上がったことに今回の取組の特徴がある。

「ひむか神話街道」に限った話ではないが、そこにずっと住んでいると、当たり前のようにあるために自分の地域の良さに気づかなかつたりする事があると思う。また、少し見せ方を演出することで、その地域に埋もれてしまっていた良さを来訪者に感じさせる事もできるのではないかと考える。

5 「気づき」のまちづくり

上記を踏まえ、今回、私が考えたまちづくりのアイデアは、下記の内容である。

地域外から芸術家や景観のプロ等呼び、「ひむか神話街道」においてそれぞれ区間を割り当て、地域に入ってもらおう。そして、その外部から来られた方に街道を通行してもらい、どうしたら沿線が「ひむか神話街道」らしい景観を形成することができるか自由に提案してもらおう。

それを元に、地域住民と外部からの方と一緒に徹底的に議論し、来訪者の心を和ませるような景観になるよう、道沿いの花や木をきれいに植栽したり、景観が町全体で一体となったものになるよう広告看板等を工夫したりするなど、芸術家等の自由な発想を触媒として、景観づくりのために住民が自ら考え、行動を起こしてもらおう。そして自分たちが気づいて動き出すことにより、地域が変わっていくことを実感してもらおう。

このように考えた理由は、外部の方から細部に至るまで提案を受けることで、例えば一般家庭の庭先まで指摘してもらおうなどすることにより、地域住民が自分の庭先なども来訪者にとっては重要なその土地の魅力になりうる要素の一つであることを気づかせてくれ、さらに、その地域で生活するという事そのものが、町の雰囲気を形作る要素になることを気づかせてくれるのではないかと思ったからである。

「京都になぜ多くの日本人が訪れたいと思うのか」ということを考えたときに、京都にはその美しさや歴史を感じさせる神社仏閣といった魅力があることはもちろんであ

るが、私は、そこに住んでいる人たちの生活が、その歴史ある町並みと一体となっていて、京都独特の雰囲気があるところにあり、その「本物の空気感」を来訪者に感じさせてくれるからではないかと思っている。

そのような「空気感」は、お金をかけてなにかを作っても、行政が一生懸命音頭をとっても簡単に作れるものではなく、その地域にある文化、伝統、そしてそこに住む人の中から自然発生的に生まれてくるものではないと形成されないと考える。

「ひむか神話街道」は、宮崎にあって他の地域にはない『日向神話』をテーマとしており、宮崎にあるオンリーワンの魅力を発信できる非常におもしろい切り口だと私は思っている。

『街道』と名が付いていることで、道路の快適さばかりに目が行きがちであるが、逆転の発想をすると、道が決して広いとは言えないその道をゆっくりと旅することでこそ、今では見かける機会が少なくなってしまった、棚田での農作業風景、通過する車にあいさつする下校途中の山里の小学生など、まだ宮崎に残っている日本の田舎の良さをじっくりと感じるができると思う。

6 終わりに

外部の人との真剣な議論を通して気づく自分の生まれ育った地域の魅力を、一つのテーマとして地域住民が自らまちづくりに取り組み始めることで、来訪者が増え、またそのことに自信を感じ、誇りを持ってその地域で暮らすことができると思う。

そして、自ら気づき、動き出すことで生まれる地域づくりは、そこに住む人たちの心を豊かにさせ、地域に愛着と誇りを持つことで自然に生まれる「本物の空気感」がより一層、その地域を魅力的なものに変えていくと思う。